

ものづくり de 教育

Vol.24 Nov. 2010

Topics

- 秋学期演習授業
- コラム：創造について
- キーワード：単元
- 1期生レポートの

東京学芸大学教育学部
小学校教員養成課程
《ものづくり教育選修》
二期生募集が
はじまりました！

秋学期がはじまり、各自後半の目標を宣言しています

10月から秋学期が始まりました。本選修の学生たちは「ものづくり教育演習Ⅱ」の初回で、これからの半年に自身が達成すべき目標を宣言し合っています。春学期の終わりからこの日までの約2ヶ月にどのように考えを積み重ねてその目標に至ったのか、伝える方も、受け取る側も真剣です。

「ものづくり教育演習」はⅠ～Ⅵまでの3年間一貫の授業です。1年生の最初に取り組むⅠでは、当初「グループで自ら取り組む何らかのプロジェクトを企画・立案し12月を目途に実行する」ことが課題とされていました。このⅠでは、自分たちから目標を見出せない状況が続き、一部方針を変更し、まずは7月のオープンキャンパスで本専修が催すワークショップの企画立案、当日の運営を全員で担うことになりました。学生たちにとってこのワークショップの経験は、やや遠回りにはなりましたが、後の「ものづくり教育演習」に行かされてくることになりました。

Ⅰは7月末で終了。終了直前に各自の「ドキュメンテーション」を報告し合い、秋学期から始まるⅡに向けての課題を把握するように努めました。Ⅱの初回では、改めて各自の課題を発表・確認し合いました。7月末以降の夏休み期間中の様々な経験（体験型集中講義や各種のワークショップへの参加など）が生かされた課題設定が多く見受けられ、各自が「やるべきこと」を切実に感じるようになりました。この結果、プロジェクトは、グループワークではなくなり、個人活動になりました。

各自がプロジェクトで目標に掲げた内容は、それぞれ異なりましたが、夏休みの間に「自分がここ（ものづくり教育選修）で学ぶ意味」をつかみかけてきたようです。今度は、新たな目標を実現するために各自が自分自身の力で動かなければなりません。年内に実行、年明けには課題の見直し、再試行など、ものすごいスピードでこなしていく予定です。（新名）



▲ 演習室での発表の様子。

教員も学生も一堂に会する演習での、みんなに見つめられてのプレゼンはかなり緊張するようです。

推進教員レポート：

創造について（ものづくりと教育のあいだ）

石井壽郎

今回は石井先生のコラムです。現在石井先生は、「学びとものづくり」という授業を本選修の1年生に開講しています。水曜日の授業の前や後に、学生たちは、ものを作ることや考えることって何だろう？自分って何だろう？といった生きている自分について自問自答、または友人たちと話合っていて悩んでいます。そんな問題を提議する石井先生の思うところを教えてください。（新名）

自分をふくむ様々な事象を創意工夫で変化させ、暮らし（生きる事）に活かす。これを「創造」というとすれば、人間は太古から創造によって生き抜いてきたと言えるだろう。でも、そんな人間が集まり、ただ創造する事を繰り返し、今現在は創造物で溢れパンク状態になってしまった。ただ一方的に創り出すコトが当り前になり、環境(その世界)に呼応した創造が行なわれていなかったのだろう。もはやモノを創る事が創造なのではなく、創らない事の方がより創造なのかもしれない。例えばエコという思想やアプリ等の方式が、現況に合った創造といえ、ただ物体を変化させるだけの創出しない創造である。

創造する時に大事な「創意工夫」とはどんな行為だろうか。複数の思考から選択したり繋げたりして新たな意味を創り出し、実現してゆく行為が創意工夫とすると、創造という出来事のコトの核心だといえるのではないだろうか。この「創意工夫」を発揮する為には、あらゆる既成概念、既存権威、固定観念などの既に存在しているコトを、一先ず隅に追いやらなければならない。その様な未知に踏み出す気持ちが必要なのである。

これからへ向けての行為であるという事では、「創造」と「教育」は非常に近いところがある。「教育」という出来事も既に存在しているコトで、環境に合わせて進化しなければ、前述のように私達に跳ね返ってくるだろう。今現在、「教育」という出来事の中にある子ども達が大人になる未来は、誰にも予想は出来ない。だからこそ、尚更に環境を見極めながら創意工夫によって更新していかなくてはならないのではないだろうか。

創意工夫するコトはそんなに難しいコトではない。簡単なコトでもないが、時間軸に乗って前に進んでいくかぎり、未来はどんな人にとっても等しく未知である。未来が白紙であるのなら、折角だから自ら踏み出して創造していかなくては。

ものづくり教育

Key word

単元 【名】よみ：タンゲン 【英】unit

『新教育学事典』（第一法規、平成2年）によると、「単元」とは次のようにまとめられる。

- ①「学習者を軸とした学習内容」、しかも「その有機的なひとまとまり」。
- ②「学習内容のひとまとまり」であるが、一方は「経験」そして他方は「教材」と、経験から教材への幅広い尺度上にまたがる。そして、この「単元」には、「経験単元」と「教材単元」という呼び方もある。

○単元と題材について 敗戦直後には、アメリカの「経験主義教育」の強い影響のもとに、子どもの「生活経験」を中心に学習内容を構成した「経験単元の思想と実践」に関心が集まった。そして「コア・カリキュラム運動」が展開された。その教科課程では「中心課程」に超教科の経験単元（コア単元）が、「周辺課程」には知識・技能の「題材」を配する「経験至上の単元構成」が試みられた。だが、この試みは十分な実を結び得なかったとされている。

ところで、現在の技術・家庭・図画工作・美術・音楽では、「単元」より、むしろ「題材」という用語を使用する。それはなぜか。「経験単元」の特徴は超教科的傾向に、「教材単元」は知識や技術の学習を重んじる傾向にある。技術・家庭・美術・音楽は、その両方の性格を兼ねている。だが、第三の方法、つまり「題材」中心の教科課程をとった。ものづくり教育の教育計画では、単元をとるのか、題材をとるのか。そこが大事な視点である。（山田一美）

ものづくり教育選修

1期生レポート

第7回 柴崎浩美「人との関わり」



▲ 実家湘南の見慣れた景色。

私は、夏休みに入って「とりあえず何でも参加してみよう」をスローガンにし、さまざまな活動に参加してきました。掛川の地域の人たちや他大学の先生方、多種多様な企業の方々など、大学の枠を超えた関わりを持つことができました。いろいろな人たちとお話している中で、「私もそう思う」や「私はそうは思わない」など、自分というものに向き合う場面が

たくさんありました。そうしているうちに、「私がやりたい方向」がだんだんと見えてきた気がします。がむしゃらに何でも参加してみることで、やっと、自分というものを踏まえ、選択する力が大切なのかなと気づいたようです。これからは、私がやってみたいと思ったことを全力でやってみようと思います。また、がむしゃらにやったことで、「思ったことはとりあえずやっ

てみよう」という意識を持って、勇気をだして前に進んでみるのが大事だとも感じました。頭の中だけで考えるのではなく、実際に実行してみて体感することが重要ということを実感しました。

私は今、「鬼ごっこ」について興味があります。きっと誰もが楽しんだことがあるでしょう。私が感じた「楽しい」という実感を頼りに、この遊びにおける楽しさについて探求したいと思っています。1人ではできない鬼ごっこ。やはり、他人との関わりが大切だと思うのです。今の私も一人で成長してきたわけではありません。私と関わりをもったことのあるすべての人に感謝し、これからもいろいろな人と関わりながら、切磋琢磨していきたいと思います。

秋期が始まって1カ月。だいぶ慣れてきた大学生活ですが、私は、秋期からはまた新しい環境でスタートしました。春期は、大学との往復4時間かかる通学時間でしたが、大学近くに住むことで、通学時間が片道10分に短縮されました。自分自身のやってみたいと思ったことを全力でやってみようと思います。

◆このコーナーでは毎月1期生が気になっていることを順番にレポートしていきます。



▲ 距離は近いけれど、東京は違う景色に見える。

◆ものづくり教育シンポジウム開催のお知らせ◆

くわしくはコチラへ

http://www.u-gakugei.ac.jp/~monoedu/NL/PDF/vol23_2.pdf

平成20年度よりスタートした文部科学省教育GP推進事業である本取組は、国内外の事例を調査し、東京学芸大学での平成22年4月の「ものづくり教育選修」開設に至っています。本シンポジウムでは、初等教育のための「ものづくり教育」のあり様を比較しながら、本選修の課題と展望を考えていきます。開催日：2010年11月20日（土）14:00～16:00 場所：東京学芸大学 芸術・スポーツ科学系研究棟4号館1階ギャラリー

本報は、文部科学省の認定する「質の高い大学教育推進プログラム」を受け、『小学校教員養成のためのものづくり教育開発』活動報告も兼ねて情報をお伝えします。

国立大学法人 東京学芸大学 田中喜美 山田一美 坂口謙一 鉄矢悦朗 石井壽郎 大谷忠

ものづくり de 教育 Vol.24

発行：東京学芸大学 A 類ものづくり教育選修

Tel&Fax: 042-329-7658 (田中研究室)

URL: <http://www.u-gakugei.ac.jp/~monoedu>

発行日 2010/12/28 編集 専門研究員 新名佐和子